



## 「日本のコブヤハズカミキリ」

高桑正敏・中林博之・小林敏男（編）

162 pp. むし社.

定価 6,400 円（＋税）

2016 年にご逝去された高桑正敏さんの心残りになっていた「日本のコブヤハズカミキリ」がこのほど、月刊むし・昆虫図説シリーズの 13 号として出版された。高桑さんの亡き後、むし社の藤田宏氏の強力なバックアップの下、中林博之氏が引き継ぎ、出版に漕ぎつけたもので、まずは、本書の上梓をお祝いしたい。

本書は、研究史、分類と各種の解説、地域別のコブヤハズ情報、採集法、生態と観察、分子系統、文献目録の各章（各章名は一部簡略化させていた）からなり、12 名の著者が執筆している。また、付録として、1975～1978 年に「月刊むし」に連載された高桑さんの著作「日本のコブヤハズ類の問題点（1）～（5）」が再録されている。42 ページを使ったカラースプレートの掲載された各地の標本写真は圧巻で、わずか 6 種に対してこのボリュームはなかなか他に類を見ない贅沢さである。

分類学的な変更としては、これまで 3 属に分類されていたコブヤハズカミキリ類を 1 属 3 亜属とし、*Parechuthistatus* 属の新和名として「ニホンコブヤハズカミキリ」を提唱した。また、セダカコブヤハズについて、新たに隠岐島後・島根半島亜種、隠岐島前亜種、中国地方中部亜種、中国地方西部亜種、淡路島亜種、小豆島亜種、四国東南部亜種の 6 新亜種を記載し、計 16 亜種に分類した。セダカコブヤハズの亜種分類に関しては、分子系統の結果と必ずしも一致しておらず、愛好家が多いだけに異論もあることだろう。ただ三宅（1980）による先行研究より格段に検視標本の産地も個体数も増え、本種の地理的変異の全容が見えてきたのではないだろうか。コブヤハズ類といえば、関心が高いのが各種間で確認されている雑種だが、雑種については 9 プレートを使った豊富な標本写真と詳細な解説がある。各種の分布・生息状況については、地域別に地元の猛者 10 名がそれぞれの調査テリトリーの状況を事細かに紹介されている。「生態と観察」は、森一規氏が、「分子系統」は中峰空氏が執筆しており、まさにコブヤハズカミキリ類の現在までの知見のすべてが集約された一冊となっている。

カミキリ屋のコブヤハズ研究熱に火をつけたのは、高桑さんの「日本のコブヤハズ類の問題点」と言って良いであろう。この連載に刺激を受けた全国のアマチュア研究者によって、コブヤハズカミキリ類の解明は各段に進み、本著にも多く引用されている。そのことを考えると、著者に名前を連ねてはいなくとも、本著は高桑さんと同時代を生きたカミキリ屋達のコブヤハズ研究の集大成といっても良いのではなかろうか。

最後に、近年の昆虫の減少は、コブヤハズカミキリ類も例外ではない。もちろん、それは採集圧だけのせいではないが、本書を読めば、コブヤハズ類の生息地、生態、習性、採集方法がかなり詳しくわかる。学術目的で掲載された本著の内容が、コブヤハズカミキリ類の乱獲に悪用されないことを切に祈りたい。

（長谷川道明）

